

俳優 石上亮の大好きな宿題
『映画感想文』

第4回 Mogera Wogura
2010年3月16日

え〜とあれは1999年、ノストラダムスの大予言の年、東北大学経済学部4年生の夏休みの時でした。オレは卒業後の進路に迷って、実家で悶々とした日々を送ってました。ある日、映画好きの父親が『七人の侍』という邦画を観ていました。オレはそこで、今まで観たこともない迫力を醸し出す「三船敏郎」という俳優に出会いました。次に父親は『大脱走』という洋画を観ていました。今度は、今まで観たこともないニヒルな雰囲気漂わす「スティーブ・マックイーン」という俳優に出会いました。どっちもヒーローがいつは出てくるおもちゃ箱みたいな映画。どのキャラクターも魅力的に描かれていて、観る人によってヒーローは変わります。オレのヒーローは、菊千代役の三船敏郎でありヒルツ役のスティーブ・マックイーンでした。この2人の日米のスターに憧れたオレは、俳優を目指すことを決め、卒業後に上京しました。

俳優になって初めて主演した劇場公開映画『Mogera Wogura』。「男・21歳」という役が決まって喜ぶのも束の間、台本を頂いてから役と向き合う日々が始まりました。「男・21歳」は監督の実体験を投影したキャラクターだったので、監督の感覚に近づく努力がメチャクチャ必要でした。また、主演というプレッシャーもありました。ああ、演じるってこんなにしんどいことなんだって、初めて実感した現場でもありました。オレが演じた「男・21歳」は、普通に彼女がいて、バイトしたり将来について語ったりするどこにでもいる大学生。年相応の悩みなんかもあったりして、例えば彼女が浮気してないか心配したり、漠然としか思い描けない将来に不安になったり。それは、何も「男・21歳」に限ったことではなく、人間なら何歳になっても何かしらの不安や悩みを抱えながら生きていると思うんですね。例えば、大杉漣さんが演じた「男・45歳」は、引きこもりの娘とのコミュニケーションが上手いかず、自分までコインランドリーに引きこもっちゃう。磨赤兒さんが演じた路上駐車取締りをしている「男・65歳」は、コミュニケーションが目的で路駐バイクの持ち主が来る瞬間を待っている。彼らは本当に不器用なんです。うまく相手に思いを伝えられない。観ていて、すごくもどかしくなります。でも、どこか愛おしい。そんな彼らの日常は、長い人生においてはほんの一瞬の出来事かもしれませんが、『Mogera Wogura』は、彼らの「今」をしっかり映し出しています。誰もが不安や悩みと友達になれる訳じゃない、不器用な生き方しか出来ないヤツもいるんだよ、ってこの映画は伝えたがってる気がします。むしろ人間くさいと言えなくもない彼らを、『Mogera Wogura』は暖かく優しく包み込んでくれます。ある時、彼らは一歩踏み出そうと行動に出ます。どういう結果が待ち受けているのか。その瞬間をお見逃しなく。